

# 時代を大観し、自らの言葉で表現する歴史学習

社会科研究会議

研究員 中原 幸司（川崎市立臨港中学校） 壬生 俊介（川崎市立井田中学校）  
穂谷 幸子（川崎市立稲田中学校） 水澤 雅之（川崎市立西生田中学校）  
指導主事 鵜木 朋和

## I 主題設定の理由

新学習指導要領では、各学校が「育成を目指す資質・能力」を学校教育目標等で明確にし、その育成に向け、社会と連携、協働して取り組む「社会に開かれた教育課程」の実現が示されている。中学校社会科においても、教科の目標として「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。」と柱書に示されている。

そこで本研究会議では、上記を踏まえ「激しい変化に対応する力」「自ら判断し表現する力」「主体的な社会参画の姿勢」を、社会科の学習を通して育成が求められる資質・能力として考えた。また、川崎市学習状況調査の結果を見ると、近年の川崎の子どもたちには「歴史を大きくとらえ理解する」「歴史の因果関係を踏まえて、事象の意義を考える」という点に課題があることが明らかになっている。そこで、これら2つのことに着目し、上記の資質・能力において、中学校社会科歴史的分野が担うべき部分について改めて検討し、「歴史を尊重し、自国を語れる力」「歴史に関わる事象を基に未来を考える力」「よりよい社会の実現に向けた各時代の人々の取組を理解する力」の3つの資質・能力の育成が必要であると考えた。これらの育成に向け、我が国の歴史の流れを大きくとらえ、歴史的事象の意味や意義を考えることや、それらを自らの言葉で表現し、これからの社会について考える歴史の学習が必要となると考えた。そのための手立てを明らかにして、日々の歴史的分野の学習が資質・能力の育成に向けて効果的に行われるよう、教材研究や授業計画の在り方等について研究するため、研究主題を次のように設定した。

研究主題 「時代を大観し、自らの言葉で表現する歴史学習」

## II 研究の内容

### 1 研究の方法

研究主題に基づいた授業実践を行う上で、研究を図1のように構想し、大きく次の3つの手立てを考えた。

(1) 手立て①: 変化や意義をとらえる単元構成の工夫

中学校学習指導要領（平成29年告示）の社会科歴史的分野では、我が国の歴史の流れを「古代までの日本」「中世の日本」「近世の日本」「近代の日本と世界」「現代の日本と世界」の5つの中項目で

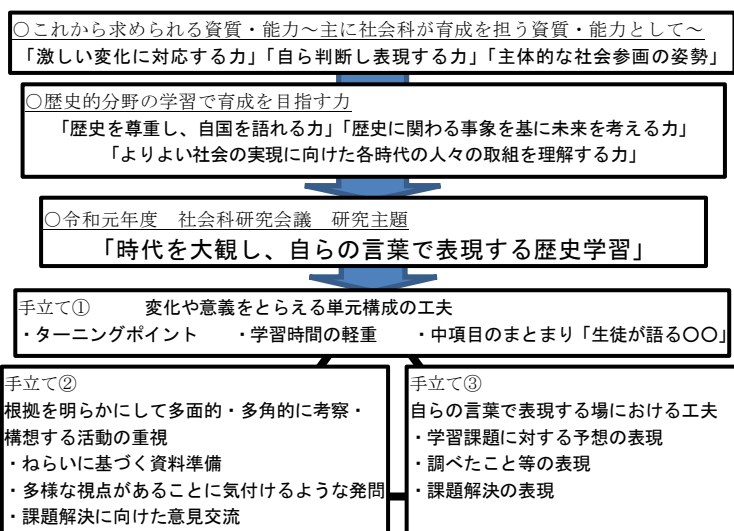


図1 研究構想図

構成している。そして、この中項目ごとに「〇〇（中項目）の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現すること。」と示されている。そのため、生徒が中項目の範囲を一つのまとまりとして歴史を大観し、小学校の学習を生かしながら、歴史的事象の意義をとらえつつ、その時代の特色を自らの言葉で表現することを重視した。そこで、中項目終了時の「生徒のゴールの姿」を「生徒が語る〇〇」（「〇〇」には中項目名が入る。）とした。例えば、「生徒が語る中世の日本」であれば、「中世は～という時代で、・・・が起こり・・・」というように「生徒の視点からの文章」を作り、そこから単元を計画した。また、「生徒が語る〇〇」の作成に向けて、中項目の範囲における「歴史の転換点」となったと考えられる歴史的事象を「ターニングポイント」とした。そしてターニングポイントでの変化や、その後の歴史への影響を考える「歴史的事象の意義について考える」ことについては時間をかけて学習するなど、学習時間の軽重をつけることの大切さ等について検討した。

### （２）手立て②：根拠を明らかにして多面的・多角的に考察・構想する活動の重視

中項目の範囲を大単元としてとらえ、学習計画を考えることで、大単元を通して必要な資料や、本時目標の実現に向けて必要な資料の精選を行った。また、新たな視点への気付きや、既存の知識の活用を促す発問を「多様な視点があることに気付けるような発問」として、学習内容に応じて取り入れた。各時間や単元の終盤で行う課題解決の場面では、各自の課題解決の時間の確保や、解決に向けた話し合い等の対話的な学びを通して、多面的・多角的に考察し表現できるようにした。

### （３）手立て③：自らの言葉で表現する場における工夫

生徒が大単元の範囲を大きなまとまりとしてとらえ、見通したり振り返ったりすることを重視した。そこで、単元の内容や計画に応じて、学習課題に基づいて生徒が予想する学習活動や、単元を大きく振り返ってまとめる学習活動を計画した。見通しと振り返りを行うことで、「中世」「近世」といった範囲の歴史を大きくとらえるとともに、主体的な学びにもつながると考えた。また、各自が課題解決としての「まとめ」を表現することで、さらに新たな視点に気付いたり、理解が深まったりすることに結びつけることをねらいとした。このような活動を行うことで深い学びにつながると考えた。

## ２ 検証授業について

### （１）検証授業１「古代までの日本」（Ａ中学校・１年生）

#### ①生徒のゴールの姿としての「生徒が語る古代までの日本」（下線部が検証授業に該当）

温暖化による環境の変化に伴い、暮らしが変化し、天皇や貴族が力をもったのが古代までの日本である。世界各地で文明や宗教がおこり、狩りや採集の時代の後に稲作が広まり、貧富の差も拡大していった。やがて富を求めて戦いが起こり、くにごできるようになると、大和朝廷は豪族をまとめて支配を強めていった。その後、東アジアから政治や税制度、文化について、渡来人、遣隋使や遣唐使を通じて学んだ。聖徳太子により、天皇中心の政治に向けた政策が行われると、その後大化の改新、大宝律令により、中央集権の国づくりが確立した。だが、天皇中心の中央集権を目指した政治は、班田収授の法の行き詰まりにより、新たに墾田永年私財法を出すこととなった。これによって、貴族が力をもって政治を行うようになり、藤原氏が政治の中心となり支配を強めていった。その後、貴族やその土地を守る武士が台頭し、力をもつようになっていった。文化では、仏教を取り入れた飛鳥文化や、国際色豊かな天平文化は、東アジアの影響を受けている。その後、日本の風土や生活の特色が表れた国風文化が生まれた。

#### ②単元の課題 「古代の社会はどのように形成され、移り変わっていったのだろうか」

#### ③本時目標（本時 13/16）

土地制度の変化によって社会はどのように変わったのかを、朝廷、貴族、農民の立場から考え、多面的・多角的に考察できるようにする。

#### ④本時における目標にせまるための手立て・工夫

・班田収授の法による公地公民のしくみと、墾田永年私財法による私有地の広がりや、朝廷、貴族、農民の立場で比べ、その変化を多面的・多角的に考察させる。

#### ⑤本時の課題 「奈良時代の土地制度の変化によって社会はどのように変わったのだろうか」

## ⑥本時の様子とその後の課題等

天皇中心の中央集権国家から、貴族が台頭する世の中に代わるターニングポイントを「墾田永年私財法の制定」と考え、大単元を構想した。本時の授業の導入では、天皇中心の中央集権を目指した政治が行われ、公地公民のしくみが整えられたことを確認した。その後班田収授が長く続かなかった理由を考察し、新たに出された法律について班田収授の失敗から予想を立てた。教師が、生徒の多面的・多角的な思考を広げるため三世一身の法を紹介し、もう一度予想を立てさせると、「税を集めやすい工夫」や「農民が逃亡しないための手立て」などの考察の他に、「三世代まででなく、ずっと私有できたらいのではないか」と発言する生徒も見られた。また、班田収授が崩れていく理由や墾田永年私財法による社会の変化については、天皇や貴族、農民の立場で多面的・多角的に考察した。そこでは自分の考えの根拠となる資料を探し、関連付けながら発表する姿が見られた。授業のまとめでは、社会の変化が分かるように板書を工夫することで、生徒が学習課題について、言葉をつなぎながらまとめることができた(図2)。課題としては、計画的に時間を確保することと、貴族が力をもった経緯をもう少し丁寧に確認して過程をとらえさせることがあげられる。

学習課題についてまとめよう  
 今までは、天皇が中心の中央集権の国づくりをして、公地公民をたてつけをして、墾田永年私財法がたてられたことで、土地を広く与える貴族が農民を雇って土地を広くとくことになった。貴族が天皇より力をもち、きかけになったと思ふ。天皇は、中央集権の国づくりをして、農民から税をとり、貴族は、自分の土地を広くとく、農民を働かせていた。いつの時代も、農民は税や、働かされて、かわいそうだと思ふ。

図2 本時の学習課題についての生徒のまとめ

### (2) 検証授業2「現代の日本と世界」(B中学校・3年生)

#### ①生徒のゴールの姿としての「生徒が語る現代の日本と世界」(下線部が検証授業に該当)

現代とは、日本が民主的な国を目指して再建と独立の道を歩んだ時代である。日本国憲法の制定や経済・教育の民主化など様々な改革により、現在の日本の土台が作られた。米ソの対立による冷戦など、世界の動きにより、日本は国際連合に加盟し国際社会に復帰した。1960年～1970年代、日本は朝鮮戦争の特需を始めとして、高度経済成長を迎え、産業・経済や科学技術の面がより発展し世界有数の経済大国へと成長したが、石油危機により、経済成長が終わりを告げることになった。また、国際社会とのかかわりにおいて、沖縄返還、日中国交正常化なども達成した。1980年代は、世界規模での米ソ両陣営の対立が終わり、冷戦が終結した。日本は、石油危機の影響で高度経済成長が終わり、国際協調の平和外交を進め、開発途上国への援助など国際社会における役割が大きくなった。グローバル化する現代社会の中で、世界平和の実現にむけた日本の役割を考えることや、今までの歴史学習から未来にむけて、一人一人が果たすべき役割について考えていくことが大切である。

#### ②単元の課題 「今の日本はどのようにしてつくられたのか」

#### ③本時目標 (本時3/11)

冷戦による世界や日本への影響について、多面的・多角的に考察できるようにする。

#### ④本時における目標にせまるための手立て・工夫

- ・第二次大戦後のドイツ・朝鮮半島・中国・ベトナムを四人班で分担して調べ、冷戦による影響について多面的・多角的に考察させる。
- ・冷戦下の日本に関係する資料を根拠に、冷戦が日本に与えた影響について考え、意見交流させる。

#### ⑤本時の課題 「冷戦は世界や日本にどのような影響を与えたのか」

#### ⑥本時の様子とその後の課題等

大単元のターニングポイントとして「冷戦の表面化」を設定した。日本への影響について多面的・多角的に考察できるように、「各国の様子」と「日本の様子」について各種資料を準備した。まず第二次大戦後の世界の様子について、核開発に関する資料から「冷戦」という新たな対立構造に気付かせ、課題を設定し、課題に対する予想を行った(図3)。また冷戦による世界への影響をA「ドイツ」・B「中国」・C「ベトナム」・D「朝鮮半島」の事例から考えさせた。班ごとにA

●冷戦は日本にどのような影響を与えたのか予想してみよう。  
 (自分の意見) (資料見本、7-7シート)  
 冷戦は朝鮮戦争の時必死に武器の輸出を日本がアメリカに提供して輸出しているから好景気になっている。  
 (他の人の意見)  
 日本を守るための経路ができた。(資料(生徒台帳簿(復讐)問題)  
 は都合が悪くは思っているのに、常務時間日は減っている。

図3 本時の課題に対する生徒の予想

～Dの担当者を決め、調べてきたことを報告し合い、その後他の班のメンバーと意見交流を行った。冷戦の日本への影響については、当時の新聞、戦後の日本人の生活の変化を示す資料を配付した。資料から読み取れることを班で話し合い、まとめることで、課題について多面的・多角的に考察することができた。課題としては、本時の中で学習活動の軽重をつけられなかったこと、それにより班での話し合いを全体で共有するための時間をあまり確保できなかったことが挙げられる。生徒が行った大単元のまとめでは、冷戦の表面化など、ある部分に対する記述が多くなってしまった。大単元のまとめの際に、各ターニングポイントを改めて示すなどの手立てが必要であった。

(3) 検証授業3「中世の日本」(C中学校・1年生)

①生徒のゴールの姿としての「生徒が語る中世の日本」(下線部が検証授業に該当)

中世とは、武士が登場して政治を行い、民衆の力が自治を行うほど強くなった時代である。源氏が鎌倉幕府を開き、封建制度によって御家人たちと結びつき、まとまりをつくった。そうした結びつきの中で、承久の乱で西国に支配を広げ、さらに元寇を追い返すことができた。その後の南北朝の争乱や室町幕府の時代には、守護の力が強まり、国を支配する守護大名も現れた。また朝鮮や明との貿易を盛んに行ったことで、地方の武士の力も強まった。貨幣を使うことが広がったり、農村では生産技術が発達したり、様々な産業が発展したことで、民衆の生活も豊かになった。その中で人々は結びつきを強め、不作や戦乱の中で一揆をおこし、自治をする集団も増えた。応仁の乱がおこったことで幕府の権力が弱まり、戦国大名が各地を支配した。やがて実力で打ち勝つ下剋上の風潮が広まった。

②単元の課題 「中世の日本の主役はどの身分の人々だったのだろうか」

③本時目標 (本時1/12)

武士の登場や古代からの変化、当時の社会背景について理解し、その知識を身に付けるようにする。

④本時における目標にせまるための手立て・工夫

- ・「なぜ武士は世の中に登場したのだろうか」という課題を立て、絵画資料から、武士の出現やその変化を考察させる。
- ・考えをまとめる際は、文頭の言葉を指定して、その先に続く文章を書かせる手立てをとる。

⑤本時の課題 「なぜ武士が世の中に登場したのだろうか」

⑥本時の様子とその後の課題等

大単元のターニングポイントとして「武士の登場」を設定した。導入場面では古代の大きな流れについて確認した。また中世についての小学校での既習事項の確認も行い、人物に着目しながら単元を貫く課題「中世の主役はどの身分の人々だったのだろうか」を設定し、予想を立てた。「武士・貴族・天皇・民衆・その他」の項目から考え、理由も答えるようにした。

大単元を通して武士の変遷について追究していくため、1時間目では武士の身分について着実に押さえておく必要があると判断した。そのため展開では「粉河寺縁起絵巻」「春日権現験記絵」「平治物語絵巻」の3つの絵画資料を少人数グループにそれぞれ配付し、読み取ったことを確認した。「どのような人がいるか」「何をしようとしているか」などを問い、「人力車を取り囲んでいる」「その中にある位の高い人を守っている」などの情報を読み取り、武士が登場した背景について考察していった。そして「土地(領地)を守る」「位の高い人を守る」という武士の役割に気付くことができた。その後、武士団の形成や平治の乱について触れ、武士たちが争いを繰り返す中で、集団としてまとまり、天皇や貴族の権力争いを解決していったことを確認した。大単元を通して「主役の身分」について問うため、各時間のまとめ(図4)では単元の課題について考える活動を意図的に行った。主な課題として、大単元のまとめで東アジアとの関わり等についての記載が弱くなってしまったことがあげられる。大単元を通して、外国とのつながりやその時代の文化の特色などを関連付ける手立てが必要であった。

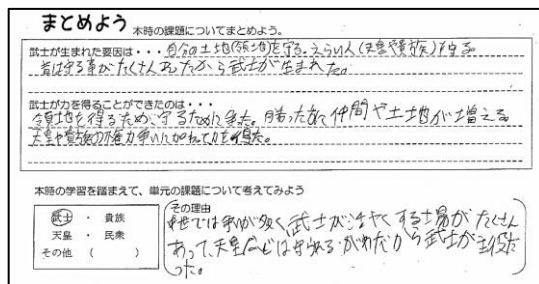


図4 本時の課題に対する生徒のまとめ

(4) 検証授業4「中世の日本」(D中学校・1年生)

①生徒のゴールの姿としての「生徒が語る中世の日本」(下線部が検証授業に該当)

中世は武士による政治が成立し広まった時代である。平安時代後半、土地を守るために農民が武装し、武士団を形成した。その中で平清盛が政治の実権を握り、その平氏を破った源頼朝が幕府を開き、武士の政治を始めた。幕府の特徴は、将軍と御家人の間で土地を仲立ちとした主従関係が生まれ、封建制度が成立したという点である。しかし東アジアの動きの中で元軍が攻めてきて、鎌倉幕府が弱体化する。南北朝～室町時代になると守護大名が力をつけ始める。また民衆たちが一揆をおこすようになる。一揆や応仁の乱により下剋上の風潮が強くなり、各地を支配していた守護大名や国人が台頭し、やがて戦国大名へとようになっていく。民衆の暮らしでは、農業生産性の向上、商業の発達により、まちや村の自治が進み、政治・文化にも大きな影響を与えるようになった。鎌倉時代の文化は、武士や禅の影響を受けた質素かつ力強いもの、室町時代は和室や歌舞伎のもとになる、武士だけでなく庶民が担い手となった文化が開いた。

②単元の課題 「中世の政治や文化の中心は誰か」

③本時目標 (本時6/10)

下剋上の風潮での、世の中の変化や支配者について多面的・多角的に考察し、表現できるようにする。

④本時における目標にせまるための手立て・工夫

・「応仁の乱後、誰が世の中を支配していくと思うか」というねらいにせまる発問をする。また、選択肢を示し、生徒が自分の意見を書きやすくなるよう工夫する。

⑤本時の課題 「一揆や応仁の乱がおこり、世の中はどう変わったか」

⑥本時の様子とその後の課題等

中世全体の流れを大きく「封建制度」→「自治」→「下剋上」と考え、「応仁の乱」をターニングポイントとした。本時では、一揆が起きた理由を資料から読み取らせ、飢饉や徳政だけでなく支配層への抵抗という面があったことに気付かせ、「下剋上」の世の中になったことを押さえた。その上で、「応仁の乱後、誰が世の中を支配していくと思うか」という発問をし、「天皇」「将軍」「貴族」「守護大名」「農民」「国人(武士)」などといった選択肢を示したのちに、自分の考えを書かせた。全体で発表する前に、まずは隣の生徒と意見を交流し、自分の考えを表現してから、全体で意見を交流した。「天皇」と答えた生徒は「かつて幕府の力が衰えたとき、幕府を倒そうとしたから」、「守護大名」と答えた生徒は「南北朝時代に年貢を半分取れるようになって力をつけた守護が各地を支配していたから」など、既知の知識を生かして考えていることがうかがえた。

最後に、「主な戦国大名とその領地」の資料を見せ、戦国大名になった守護大名や、下剋上でのし上がり戦国大名になった守護代、国人について確認した。本時でとらえさせたかった「下剋上の風潮」「力をつけた守護大名や国人が戦国大名となったこと」という内容は理解していた(図5)。本時の課題としては、生徒自身が資料を選択し、調べて話し合う場面が少なかったことがあげられる。

大単元のまとめでは、中世全体を見通して、支配者の移り変わりについて図で表す活動を取り入れ、「中世の政治や文化の中心はだれか」という大単元の課題に対

して文章でまとめた(図6)。「力をつける」という言葉を用いて、中世の変化を表していることから、大単元全体を見通した学習課題の効果と、単元全体を振り返って中世の特色を考える

活動の効果が見られたが、時間の確保については課題が見られた。図で表す活動を取り入れてまとめを行ったため、計画では1時間としていたが、2時間扱いにして丁寧に振り返るなど、実態に応じて大単元計画を柔軟に考える必要があった。

自分の言葉でまとめよう  
一揆や応仁の乱がおこり下剋上の世の中になっていったので、将軍の力は弱くなり、守護大名や国人(武士)や守護が戦国大名になっていた。

図5 本時の課題に対する生徒のまとめ

中世の政治の中心は武士だと私は思いますが、平安時代の終りのころから農民が武装して武士となり、平氏と源氏という武士団が力をつけていきました。さらに平清盛は平氏の大権を握り、政治を握ったため、その平氏を破った源氏は鎌倉幕府を成すし、勢力を伸ばしていったからです。しかし将軍は3代までしかつづいて、その後は戦国大名の北条氏に実権を握った。元寇は幕府の力が弱くなり、選定が力をつけていきました。天皇は、徳政は鎌倉幕府をたおしたが、建武の新政は幕府を倒した。室町時代は武士の力が大きくなり、南北朝の内乱がおこり、室町幕府の足利義満が南北朝をまとめたからです。室町幕府の政治は中世に権力を集中するため、守護が力をつけていき、守護大名という人があつきました。一揆や下剋上のおかげで、農民も少し力をつけました。応仁の乱の後、守護大名や守護が戦国大名となり、力を付けていきました。

図6 中世全体の生徒のまとめ(抜粋)

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 手立てに基づく成果

##### (1) 変化や意義をとらえる単元構成の工夫～「生徒が語る〇〇」「ターニングポイント」について～

生徒が大単元全体をとらえて特色をまとめるためには、授業者が「どのように事象を関連付ければよいか」「歴史的事象の意味や意義についてどのようにとらえればよいか」等を明確にしておくことが求められる。この「関連付け」を「生徒が語る〇〇」、「大単元で特に重視して意味や意義を考える歴史的事象」を「ターニングポイント」で示した。これらは授業者が単元を計画するにあたり、「生徒の視点から時代を大観する」際によりどころとなるものであった。実際には「生徒が語る〇〇」と「ターニングポイントを柱とした単元計画」を並行して作っていったため、その内容に応じた資料の準備や学習活動の計画ができた。そのため、生徒の大単元のまとめにその効果が表れていたと考える。

##### (2) 根拠を明らかにして多面的・多角的に考察・構想する活動の重視～多様な立場で考えることの重視～

ターニングポイントを明確にしたことにより、「ターニングポイントの意義」を考えるには、「多角的に」考え、「多様な面がある」とらえる」ことが必要となった。そのため、「身分ごと」「国ごと」の違い、といった多様な立場で考える活動は効果的であった。単元や本時の目標の実現に向けて資料等の準備を行ったため、これら資料を根拠として多面的・多角的に考察する生徒の姿が見られた。

#### 2 手立てに基づく課題

##### (1) 自らの言葉で表現する場における工夫～課題解決における「外国の影響」「文化」について～

外国とのつながりや文化の面等について、課題解決における歴史的事象のつながりが弱かった。ターニングポイントの多くが「政治的な面」を取り上げているため、「ターニングポイントを柱とした単元計画」において、「外国の影響による政治の変化」「政治の変化による文化の変化」といったつながりを重視する必要がある。「この事象は、その後の時代にどのような影響を与えたのか」という学習課題等を設定し、解決するためには、事象のつながりを複雑に考えず、生徒の立場に立って明確にすることがさらに求められる。「社会的事象の意味や意義」を考えることは、「時代の大観」に不可欠な活動であり、その手だての充実を生徒の実態に応じて考えることが大切である。

##### (2) 自らの言葉で表現する場における工夫～課題解決における手立てと時間の確保～

「課題を追究したり、解決したりする活動」は社会科の目標に示されている活動であり、課題解決において「大単元全体を振り返る」活動は必要である。しかし、10数時間の学習を振り返ることは容易にできることではないため、相応の手立てを行うことと、時間の確保が求められる。そのために、大単元における単元計画のさらなる検討と、取り上げる事象や資料等の精査が求められる。また、大単元全体を振り返り課題を解決する際には、生徒の実態に応じて、大単元全体における各ターニングポイントを確認する等の手立てが必要である。

本研究では、授業者が中項目の範囲を見通して単元を計画することは、生徒が時代を大観して自らの言葉で表現することにつながる、ということが明らかになった。上記2つの課題を踏まえつつ、今後も「生徒のゴールの姿」を明確にして、そこに向けた手だてを考えていくことが大切になる。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼を申し上げます。

#### 【指導助言者】

川崎市立中学校教育研究会社会科部会 部会長（川崎市立臨港中学校長） 松崎 宏行 先生  
川崎市立中学校教育研究会社会科部会 副部会長（川崎市立南菅中学校長） 黒川 保之 先生